

# 柳生兵庫助

津本陽

6



津本陽

柳生兵庫助

6



柳生兵庫助 六

定価 一一〇〇円

一九八八年四月二五日 印刷  
一九八八年五月一〇日 発行

著者 津本陽

編集人 沢島毅

発行人 川合多喜夫

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋／大阪市北区堂島／北  
九州市小倉北区紺屋町／名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版  
製本 大口製本

検印省略

Printed in Japan

ISBN4-620-10306-3

柳生兵庫助・目次（第六）

天狗抄二

5

水中の月

123

装帧  
搦田  
幹

柳生兵庫助

六



## 天狗抄二

鶯が柳生館大書院の軒端にきて、群れ雀を追い散らしていた。

そのさまを、縁先に坐っている幼童が見あげていた。背丈のあるのびやかな体つきで、水浅黄麻帷<sup>かた</sup>子に半袴をつけ、小脇差をたばさんでいる。

前髪をのこした幼なげな顔だちは、かぞえの七、八歳ほどに見えた。

兵介は稽古を終え、渡り廊下を大書院へむかう途中、童児を眼にとめ呼びかける。

「七郎、父御<sup>ちちご</sup>と同道して戻ったか。よく参ったな」

七郎と呼ばれた少年はふりむき、兵介を見て縁に手をつき、うたうようにいう。

「これはご本家さま、おひさしぶりにござりまする」

「うむ、しばらく見ぬうちに体つきが変ったのう。ひとまわり大きゅうなったようじゃ」

兵介は笑顔で近寄り、七郎の頭をなでる。

七郎は慶長十二年（一六〇七）柳生館で生まれた、宗矩の長男であった。

戸障子をあげはなし、涼風の吹きぬける広間で、脇息にもたれていた宗矩が、兵介に話しかけた。「こやつも兵法<sup>ひやうほう</sup>を仕込まねばならぬ年頃となったが、江戸に置いては儂<sup>やつ</sup>が雑用<sup>ざよう</sup>に追われ忙しきゆえ、しないの持ちようを教えてやる暇もない。そのため連れ戻ったのじゃ。しばらくお前に預けるゆえ、致しあげてやってはくれぬか」

「さようなことなれば、いつなりとも引き上げます。七郎は筋がようござりますか」  
宗矩はうなづく。

「親の口から申すのもおかしかろうが、七郎には天与の器用があるようじゃ。お前に鍛練してもらつたなら、さがが楽しみじゃとひそかに思うておるのやが」

「叔父上がさように目星をつけらるるほどならば、七郎の器用はさだめし拔群なるものにござりましよう。こなたにいつ頃まで預かればようござりますのや」

「うむ、お前が手離してもよしと見込みをつけるまでじゃ。まず十年は預けておこう」

「それなれば、致しあげてお返し申します。十五の年齢とよしになるまでには、ひと通りの太刀遣いは教えられましようほどに」

のちに柳生十兵衛として、剣名を天下にはせる七郎は、すずやかな眼差しを兵介にむけ、母の膝もとをはなれてきた淋しさのかげりをも見せない、凜々しい立居たちいであった。

兵介は二十四も年齢のはなれた、わが子のような従弟を、いつくしみをこめて見る。

「叔父上がお戻りになられしご用向きは、七郎を預けてゆかれることにござりまいたか」

宗矩はみじかく笑う。

「そののみにて大和へ戻ってこられるほどの、閑雅なる身上であれば申しぶんはないが、いつにかわらぬ騒がしき身すぎ世すぎをいたさねばならぬ。こたびも、ちと変った用で参ったのじゃ」

やはり叔父は、何かわずらわしい頼みごとを持ってきたのであらうと、兵介はさとった。

宗矩は豪華な黒漆金蒔絵の煙草盆を膝もとにひき寄せ、長煙管で煙草をふかせていた。彼はいいづらなのか、紫煙のゆくえに眼を遊ばせつつ、案じ顔であった。

兵介が黙っていると、宗矩は鈴を振って女中を呼び、酒の支度を命じた。

「兵介、まだ陽は高いが、このち稽古はいたすのか」

「叔父上がおわせられしゆえ、いたしませぬ」

「ならば酒の相手をしてくれるか」

兵介は思わず口もとをほころばせた。

宗矩は押しがつよいようにいて、気弱い一面を見せることがあった。いいにくいことをいわねばならないときには、しきりに酒を欲しがる。

「叔父上、お手の指が煙草の脂で汚れております。よほど煙草をおつまみになられるのでござりましょう」

「いや、そういわれてははずかしいがのう。喫みはじめるとやめられぬ。近頃ではそのゆえか、しないを振ると息切れがいたす始末じゃ」

「養生いたせし者が長命できるとはかぎりませぬが、兵法には煙草などはいらぬものゆえ、ほどほどになされるがようござりましょう」

「いや、そういわれては面目ない」

宗矩は頭をかいた。

しばらく江戸の様子などを聞くうちに、兵介は宗矩に問われた。

「館やまたにおれば、これと変った世の噂もなからうが、他出たていたす用向きも稀れであらうし、まずは世捨て人の暮らしというべきかのう」

「いかさま、さようなる仕儀にござりまする」

兵介は、小幡景憲と音羽の在所に向いたことを、宗矩には告げなかった。

館には音羽小三郎もいる。柳営の中枢で、家康の懐刀として隠密に行動することの多い宗矩は、物

事の判断を縁者の側に立つよりも、公人としての立場とする性格であった。

女中が酒肴の膳をはこんできた。

「お前はあけくれこの辺りの鯉を食うておるゆえ、ありがたみは分るまいが、儂には分る。木津川の鯉は泥のくさみもなく、身がしまつて、將軍家でさえめったに賞味できぬ。極上の味わいじゃ。これで酒を呑めば、寿命がのびるというものや」

宗矩は酒の酌をしようとする女中を、厨へ戻した。

「叔父、甥がひさびさの酒ほがいは、差しつ差されついたのがよいのじゃ。七郎、そのほう稽古所で、しないなど振って参るがよい」

宗矩は幼ない息子をも大書院から出てゆかせ、瓶子を手にとり、兵介の杯に諸白の酒を注ぐ。

押し鮓、鯉汁、鯉のあら、あおなますなど、簡素な肴が掛盤にならんでいて、どれも千世の心づくしがこもって美味であった。

日向にうねる蟬の声を聞きつつ、井戸で冷やした酒を喉に流しこむと、胃の腑から熱い酔いが体じゅうにひろがってゆく。

「兵介、うちあけて申せばもう。儂はこのたび大御所さまより、ちと面倒なる用向きを承つてのう」「どのようなご用にござりまするか」

「このたび九州平戸にて、オランダ国でつくりし五貫匁筒を八挺買ひもとめることになったのやが、大坂方がこれを嗅ぎつけおったのや。早速に平戸へかけつけ、オランダの商人に買値を吊りあげ、大筒の買ひもとめたと申し入れたが、肝心の品がもはやなきゆえ、つぎの船が着くまで待てといわれた。大坂方では待ちきれず、ホルトギス（ポルトガル人）より大筒買ひいれかたを策しおるといふことじゃ」

家康は天下の名城、大坂城を陥落させる攻城兵器として、大口徑の大筒を用意せねばならないと、考えていた。

大坂城の巨大堅牢な城門、城壁を破壊するには、これまで日本で用いたことのない、大口徑の火炮を使用せねばならない。

国内の鉄砲鍛冶では、そのような大筒は製作できない。家康はオランダ人、イギリス人の商人から、ひそかに大筒を購入していた。

「大筒の買い求めには、三浦按針もはたらいておる。按針はカルベリン、セーカーなどと申す大筒を四挺ほども買ったというがこたびのオランダのものほどに大きなものではない。されば、大坂方では平戸より京都へ送るオランダ大筒八挺を、道中にて奪い、もし奪いとれぬときは大筒を積んだる便船を、海中に沈めようと画策いたしおるのじゃ」

「叔父上は、さような大坂方の秘事を、いかようにしてお知りになられるのでござりまするか」  
宗矩は話に熱中し、頬を上気させていた。

「もとより、半蔵組の隠密が探索して参るのやが、あやつらがいうには、大坂方には藤林長門守がついており、忍者の束ね役をいたしおるらしい。藤林といえは、服部、百地と肩をならべし容易ならぬ奴じゃ。この三十年がほどは、名を聞いたこともなかったが、どこぞで露命をつないでおったのであらう」

兵介は、音羽村で長谷の新蔵に聞いた話を思いだした。

新蔵は和泉陶器の小出の陣屋から、戻ってきたといっていた。

「叔父上は、これより大筒を警固するために、平戸へ参らるるのでござりまするか」  
宗矩はうなずいた。

「そうじゃ、儂は大御所さまのお指図にて、大筒を運ぶ便船に乗り、平戸より堺湊までつきそって参るのじゃ。便船には服部半蔵組同心三十人が乗り組むことになっておる」

「それならば、大坂方もついている隙はござりますまい。お心を安んじなされて、お出ましなされませ」

宗矩は眉根をひそめた。

「儂にひとりで行かせようと申すのか、お前は。同行を頼むつもりで参ったのに、叔父を見殺しにするのじゃな」

兵介は笑声をたてた。

「なんで見殺しにいたしますのや。伊賀同心三十人がつき従い、ほかに乗り組みの役人もおるのでござりましょうに」

宗矩は兵介につられ、苦笑いをもらった。

「これ兵介、儂はのう、お前に同道してもらいたいのは、危急にのぞんで他の者を頼りにはできぬからや。伊賀同心というたとて、いざとなればわが身を守るのが大事じゃ。お前はちがう。儂の甥で、しかも天下に二人とない兵法達者ではないか。お前が動けば、家来の小猿と千世も従うにちがいない。いずれもひとつぶ撰りの忍者であろうが。儂が死地に陥れば、かならず助けてくれる頼もしき味方が三人もおれば、無駄に命を捨てずにすむというものじゃ」

兵介は叔父の頼みを聞くまいと考える。

これまで宗矩のもとにに応じ、危険きまわりない任務を幾度もはたしてきた。そのために、千世、小猿はともに深手を負った。

「叔父上も、いまにいたるまでのいきさつがあるゆえに、私への頼みをためらうておられたのでござ

りましょう。千世、小猿は罷りちがえは落命するほどの傷をうけてござるゆえ、こたびは私に従わぬやも知れませぬ。私とて、このうえ生死の境いをくぐりぬけるごときはなれ技は、おことわりいたしとうござります」

「小出が陣屋には、円明流の宮本と申す兵法者がいてのう。こやつが幕府隠密を寄せつけぬ。いままで幾度か殺そうといたしたが、放った刺客はすべて返り討ちをくろうた。儂もこの年齢では、宮本に仕懸けられたなら、勝てるかのう」

宗矩はなかばひとりごとのようにつぶやいた。

（叔父上は宮本武蔵政名の剣名が、当今畿内はもとより遠く九州にまで聞えておるのを知ったうえで、儂を誘うておるのじゃ）

兵介は宗矩の巧みな誘いに、いらだたしい思いをかきたてられる。

宮本武蔵が大坂方隠密に加わり、襲いかかってくるならば、宗矩はまず勝ちめがない。鉄砲で打ちとるよりほかに方便はなからうが、神通力をそなえているであろう武蔵が、たやすく鉄砲の的になるはずもなかった。

兵介は黙りこみ、酒杯を口にはこぶ。武蔵は関ヶ原の戦で宇喜多の軍勢に加わりはたらいだがために、諸国大名への仕官も叶わず、大坂方へ心を寄せたのである。

そのうえは、全力をなげうち手柄をたてようとつとめるであらう。

宗矩が問いかけてきた。

「宮本武蔵と申す牢人は、どれほどの腕前じゃ。お前は紀州で宮本の太刀遣いを見たであらう」  
宗矩は兵介が武蔵に逢った事実も、知っていた。

兵介は伏せていた眼をあげる。

「あの男には、伊賀者も近寄せぬ。寄れば斬られましよう」

「儂も斬られるか」

「分りませぬ」

「しかと申せ。勝味はないか」

「勝負は斬りおうたうえでのこと。ただ、叔父上にはなき氣圧が、武蔵にはありますれば、容易ならざる敵と存じまする」

「やはり、さようか」

宗矩は口をつぐんだ。

夜になって、兵介は離れ屋の小座敷に戻った。大書院では宗矩が燈台のもとで、しきりに書信をしたためていた。蚊遣りの煙が庭先まで流れ出ている。七郎はさきに寝たようであった。

兵介が床をのべ、寝支度をしているとき、庭先から小猿と千世が姿をあらわした。

「若さま、江戸の旦那さまは、平戸へいかはるのでござりまっか」

小猿が問いかけてきた。彼は黙っている兵介に詫げる。

「あげな大きな声でいうていやはったら、私が<sup>わたい</sup>ような忍術遣いには、聞くまいと思うても聞こえまっせ。それで、いまお千世はんと相談して、寄せていただいたのだす。若さまは、私らに氣兼ねしやばって、江戸の旦那さまの頼みを、ことわりなはったのでござりまっか」

「いや、さようなことはないぞ。儂が叔父上の手先に使われるのが嫌で、御遠慮いたしたのや」  
小猿は首をかしげた。

「それやったら、考え直さはったほうが、ええのと違いまっしやろか」

小猿は縁先から座敷へあがつてきて、兵介と膝をつきあわせた。千世も傍へきた。

蒸し暑い庭面の闇で、地虫が啼き声の尾をひいている。

兵介は小猿を見たまま、黙っていた。小猿が低い声音で語りかける。

「若さま、さっき又右衛門（宗矩）さまは、小出の陣屋に宮本武蔵がおると、いうていやはった。小出の陶器陣屋に藤林長門が逗留しておることは、幕府では知っておりますのや。又右衛門さまは、大坂方の忍びの者がどれほどの人数か、ご存知だっしゃろ。そのうえで、若さまに合力を頼んでいやはる。ということは、命賭けということだす。小幡さまの音羽行きも、放つときや死なはるところやったが、又右衛門さまもおなじことだっせ。藤林長門は、伊賀の忍者のうちでは神仏にひとしい、おそろしい力を持っております。長門のためには、命放りだしよる伊賀者は、なんぼでもおりますのや。又右衛門さまがいかに兵法達者でも、長門にはやられまっしゃろ」

藤林長門は仕物（しもの）（謀殺）にかけては名人といわれた、石川の五右衛門をもうわまわる手練である、といわれていた。

彼は伊賀忍者を統べる上忍であるのみでなく、自らも忍びの達者である。

「若さま、小幡さまを扶けて、叔父御に手をかさず、見限りなはるのは、人の道にはずれたことと違いまっしゃるか。それでは済みまへんやろ。家来の私がおこなことというのは、おこがましいかも知れまへんが、小柳生の庄は、亡くならはった旦那さまが、又右衛門さまともどもに、大御所さまにご加勢した手柄によって、戻してもらはったものだっしゃろ。このたびの又右衛門さまのお頼みは、大御所さまのお下知を果さんがためであれば、知らぬふりはできまへん。旦那さまのお心のうちも、おなじことに違ひおまへん。私らは、若さまの家来だつさかい、幾度危ない橋を渡らせてもろうても、異存はあらしまへん。若さまのお胸のうちも、分りまっせ。又右衛門さまは、ちと身勝手にす

ぎるところもあるお方だっさかいな。そやけど、やっぱり身内だっさかいな。放っとくわけにはいかしまへんやろ」

兵介は小猿の意見を聞くうちに、宗矩への反感がうすらいだ。

彼はすなおに、うなずいた。

「よういうてくれたな、小猿。お千世も、小猿とおなじ考えか」

「さようにござります。若さまはやはり叔父御さまにご合力なさるのが、道にはずれぬことかと存じまする」

兵介は口もとに淡い笑みをうかべる。

「やれ、あの身勝手な叔父御がために、また手間のかかる仕事をいたさねばならぬか。まずは、やむをえぬと申さばそれまでの事やが、何とこの腹立たしい気がいたさぬでもないわ。お前どもが申すことは分ったゆえ、寝ぬるがよい」

二人が去ったあと、兵介は蚊帳のうちに寝ころび、苦笑いをする。

彼にとって、宗矩は面憎い肉親であった。処世の才にたけ、大御所にとりいって帷幄の謀臣として重んじられ、兵介を手足につかい幾度か死地におもむかせ、功はおのれひとりのものとする。

柳生一統のうちよりただひとり、幕府に奉公しているのを手柄顔にするが、つまるところは、わが出世を考えているのみで、兵介たちは捨て石にしてかえりみない。

（妙な男が一統のうちにできたものやが、小猿のいう通り、放っとくこともできぬ。これも悪因縁か）

兵介は、病床の敵勝もおなじ思いであろうと想像する。

十九歳年下の弟が、兵介を死の危険に迫いやるのを、敵勝は平静な気持ちで許すわけがなかった。